

後

ハ

江苏工业学院图书馆
藏书章

集

少
の
二
七

鏡花全集 卷二十三 第二十三回配本（全二十九卷）

定價二千六百圓

昭和十七年六月二十二日 第二刷發行
昭和五十年九月二日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
發 行 所 株式會社 岩 波 書 店

電話（〇三）二五五一四二

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

小品

神樂坂七不思議	(明治二十八年三月)……………	三
妖怪年代記	(明治二十八年三月―六月)……………	五
鐵槌の音	(明治三十年六月)……………	二〇
迷子	(明治三十年八月)……………	二二
十萬石	(明治三十年十月)……………	二七
怪談女の輪	(明治三十三年二月)……………	四〇
森の紫陽花	(明治三十四年八月)……………	四七
山の手小景	(明治三十五年十二月)……………	五一
術三則	(明治三十九年二月)……………	五五
聞きたるまゝ	(明治四十年二月)……………	五七
花間文字	(明治四十一年四月)……………	五八

妙	齡	(明治四十一年五月)	六
錢	湯	(明治四十二年十二月)	五
松	の葉	(明治四十三年一月)	七
畫	の裡	(明治四十三年十二月)	九
麥	搗	(明治四十三年十二月)	五
鑑	定	(明治四十四年三月)	二
人	參	(明治四十四年五月)	八
一	席話	(明治四十五年一月)	五
唐	模樣	(明治四十五年三月・六月)	七
廓	そだち	(明治四十五年五月)	二
み	つ柏	(大正三年三月)	五
雛	がたり	(大正六年三月)	二
五	月より	(大正八年五月―十二月)	八
月	令十二態	(大正九年一月―十二月)	四
番	茶話	(大正十一年五月)	〇

次 目

婦人十一題	(大正十二年一月—十一月)	二〇五
くさびら	(大正十二年六月)	二三
祭のこと	(大正十二年八月)	二七
露宿	(大正十二年十月)	三二
十六夜	(大正十二年十月)	三四
間引菜	(大正十二年十一月)	三五
春着	(大正十三年一月)	二八四
湯どうふ	(大正十三年二月)	三〇一
二三羽—十二三羽	(大正十三年四月)	三〇七
玉川の草	(大正十三年十月)	三四
火の用心の事	(大正十五年四月—五月)	三九
眞夏の梅	(大正十五年九月)	三五六
麻を刈る	(大正十五年九月—十月)	三六五
深川浅景	(昭和二年七月—八月)	三九一
鳥影	(昭和三年一月)	四四四

九九九會小記	(昭和三年八月)	四四七
木菟俗見	(昭和六年八月)	四五三
若菜のうち	(昭和八年二月)	四七三

紀行

彌次行	(明治三十二年十二月)	四八三
熱海の春	(明治三十五年一月)	四九二
城の石垣	(明治三十五年二月)	四九四
吉浦蜆	(明治三十六年二月)	四九七
道中一枚繪	その一 (明治三十七年一月)	五〇一
道中一枚繪	その二 (明治三十八年七月)	五二〇
左の窓	(明治三十七年七月)	五一八
日記の端	(明治三十八年五月)	五四
大阪まで	(大正七年十月)	五七
七寶の柱	(大正十年七月)	五四〇

飯坂ゆき	(大正十年七月)	五六〇
雨ふり	(大正十三年七月)	五七四
玉造日記	(大正十三年七月—九月)	五九二
栃の實	(大正十三年八月)	六七二
城崎を憶ふ	(大正十五年四月)	六七九
十和田湖	(昭和二年十月)	六九一
御存じより	(昭和三年一月)	七三三
啄木鳥	(昭和三年一月)	七五二
十和田の夏霧	(昭和五年十一月)	七七六
唄		七七九
俳句		八二一

小

品

榛 路の名所 針仕事 孫びさし 桑畑 紫の旗 夜談

紺紙蝶影 柳の小家 櫻 孟蘭盆 蒟蒻怨靈 森の妖女

木の實 川魚 夜釣 いろ／＼の目ひとつ 蛇松の鱗五郎

劇のうはさ 椿あかり 祕刀 窓の眞珠 朝霜

神樂坂七不思議

明治二十八年三月

世の中何事も不思議なり、「おい、ちよいと煙草屋の娘はアノ眼色が不思議ぢやあないか。」と謂ふは別に眼が三ツあるといふ意味にあらず、「春狐子、何うでござ、彼處の會席は不思議に食せやすぜ。」と謂ふも譽め様を捻るのなり。人ありて、もし「イヤ不思議と勝つね、日本は不思議だよ、何うも。」と語らむか、「此奴が失敬なことをいふ、陛下の稜威、軍士の忠勇、勝つなアお前あたりまへだ、何も不思議なことあねえ。」とムキになるのは大きに野暮、號外を見てびしや／＼と額を叩き、「不思議だ不思議だ」といつたとして勝つたが不思議であてにはならぬといふにはあらず、こゝの道理を嚙分けてさ、この七不思議を讀み給へや。

東西、最初お聞に達しまするは、

「しゝ寺のもゝんぢい。」

これ大弓場の爺様なり。人に逢へば顔相をくづし、一種特有の聲を發して、「えひゝゝ。」と愛想笑をなす、其顔を見ては泣出さぬ嬰兒を――、「あいつあ不思議だよ。」とお花主は可愛がる。

のまゝ、眞夜中をすぐに信夫郡、此の飯坂を志したのは、さきの年かれに龍膽の鑿を與へた、おなじ土地の花屋の店で見た、たをやかな娘に一度逢つて、自分の運命を試しようとしたのであつたを。

既に首途が葬儀社の前からで、穿いた草鞋が葬禮の草鞋である。

奇蹟か、奇怪か、思ひがけない事が研屋の所謂（一萬石の若殿）の落人の身に數々起つた。

先づはじめは、浦和手前の二十三夜祠の森を野中に見る街道であつた。いつかは蛇つかひの婦と、黒雲に乗つたやうに飛んだ、其の自動車に故障の起つた處である。勿論二度めの時は、研屋の爺の穿かせた草鞋で、白山上の追分から巢鴨、板橋舊街道を、夜の三更に辿つて、幸に野犬にも襲はれないで、戸田川の橋も越えて、暗夜でも心覺えの、あれが二十三夜祠と、飛天夜叉が教へた時自動車が動かなく成つたんだ、と其處に事あつた處だけに瞳に映る。……畑中にこんもりとした黒い森が、旅馴れないものの目には、東海道富士山ほどに思はれると、あの時、運轉手が、もう寝る覺悟して突臥したと思ふ、路傍の榛の木形の形さへ醜氣ながら描かれた。影にも形にも誘はれたやうに成つて、鶴來はつい、其の時の運轉手と同じ形に、同じ處へ跼んだ、そして膝に組んだ腕へ額を俯向に附着けた。

睡の魔と言ふものの形は、こんなものであらうも知れない。鶴來は堪難い睡氣に魅かれたので

餅菓子店の店にツンと濟ましてる婦人なり。生娘の袖誰が曳いてか雫子の聲で、ケンもほろい
の無愛嬌者、其癖甘いから不思議だとさ。

さてどんじりが、

「繪草紙屋の四十島田。」

女主人にてなかくの曲者なり、「小僧や、紅葉さんの御家へ参つて……」などと一面識もない
大家の名を聞こえよがしにひやかしかいおどかす奴、氣が知れないから不思議なり。

妖怪年代記

明治二十八年三月—六月

一

予が寄宿生となりて松川私塾に入りたりしは、英語を學ばむためにあらず、數學を修めむため
にあらず、なほ漢籍を學ばむにもあらず、他に密に期することのありけるなり。

加州金澤市古寺町に兩隣無き一字の大廈は、松川某が、英、漢、數學の塾舎となれり。舊は

咄嗟に聲を交はすと、鶴來の身體が軽く浮いて宙に上つた。

「待てく。」

と一個が言つた。

「草鞋を見ろい。はき方が本式だ。」

「うむ、旅人らしいぞ。」

と應じたのがある。

「驅出しらしい、が、そつとして置け。」

鶴來の身體が素直に成つて敵に立つた。雲から丸太棒を一寸おろしたやうであつた。

「おい若い人、誰にも言ふなよ。」

やゝ横雲の白みかけた靄まぎれに、二十三夜祠の森の方へ歸るのもあれば、敵を横に行くもあり、濟まして街道を通るものもある。工夫體のものも見えれば、箕直しの風なもあり、乞食そのまな奴も居た。七人ばかり、いづれも、のそりくとして遠ざかるのが、たとへば、黄昏を蝦蟇の行方に似て、のそりくとしつゝ、いつの間にか、ふいと怪しく消えたのであつた。

路の名所

と板戸を敲き、「この執念深き奥方、何とて今宵に泣きたまはざる」と打笑ひけるほどこそあれ、生溫き風一陣吹出で、腰元の携へたる手燭を消したり。何物にか驚かされけむ、お村は一聲きやつと叫びて、右側なる部屋の障子を外して僵れ入ると共に、氣を失ひてぞ伏したりける。腰元は驚き恐れつゝ件の部屋を覗けば、内には暗く行燈點りて、お村は脛も露に横はれる傍に、一人の男ありて正體も無く眠れるは、蓋此家の用人なるが、先刻酒席に一座して、醉過して寝ねたるなれば、今お村が僵れ込みて、己が傍に氣を失ひ枕をならべて伏したりとも、心着かざる狀になむ。此腰元は春といひて、もとお村とは朋輩なりしに、お村は寵を得てお部屋と成濟し、常に頤以て召使はるゝを口惜くてありけるにぞ、今斯く偶然に枕を並べたる二人が態を見るより、惡心むらむらと起り、介抱もせず、呼びも活けで、故と燈火を微にし、「かくては誰が眼にも……」と北叟笑みつゝ、忍やかに立出で、主人の閨に走行きて、醉臥したるを搖覺まし、「お村殿には御用人何某と人目を忍ばれ候」と欺きければ、短慮無謀の平素を、酒に彌暴く、怒氣烈火の如く心頭に發して、岸破と蹶起き、枕刀押取りて、一文字に馳出で、障子を蹴放して藁地に躍込めば、人畜相戯れて形の如き不體裁。前後の分別に遑無く、用人の素頭、拔手も見せず、ころりと落しぬ。

「いや、要らない。」

「はい。」

「見なざる通りです、草鞋を穿いて居る。」

と對手を見ると、頬被をした年配も餘程の親仁である。頬被に別條はないが、萎えた角帯をちよつくり結びで、手織縞の袴を着て、草履穿きは些と可笑しい。——驛の出口には五六臺俵が並んで、半被の屈竟なものも見たのに——これは、組合の世話係だらうと、様子を見ると、見られた親仁も、氣が着いたか、ニコ／＼顔中を皺にしながら、

「突拍子もねえ、御免下せえまし。私は平八と言ひまして、こゝの門番のやうな苔の生えた爺でね。……今は疝氣で留めとりますだが、古くからの俵夫ががす。旦那が乗すと言へば、若いものに俵を借りて、何、何だよ。此でも飯坂までなら此の服で私が曳いて一走りお供をする氣で、えら濟みましねえ、お足を留めたでござります。はい、もし、した／＼とおいでなせえまし。……私も飯坂まで歸るで、お邪魔でもちよつくら、お供をしますすべいで。」

それから歩行き出した。

「俵に乗んなされば可いだになあ。賃錢も何も入りましねえが、一つ我慢して何うだらうかね。」

「まあ、可いよ。——第一賃錢なしだなぞつて、飛だ事ぢやあないか。何うしたんです。」

りければ、「いづれも吉兆に候ひなむ」と主人を祝せしぞ愚なりける。午前少しく前のほど、用人の死骸を發見したる者ありて、上を下へとかへせしが、主人は少しも騒ぐ色なく、「手討にした」とばかりにて、手續を経てこと果てぬ。お村は昨夜の夜半より、藪の真中に打込まれ、身動きだにもならざるに、酒の香を慕ひて寄來る蚊の群は謂ふも更なり、何十年を経たりけむ、天日を蔽隠して晝猶闇き大藪なれば、濕地に生ずる蟲どもの、幾萬とも知れず群り出でて、手足に取着き、這懸り、顔とも謂はず、胸とも謂はず、むず／＼と往來しつ、肌を嘗められ、血を吸はる苦痛は云ふべくもあらざれば、悶え苦み、泣き叫びて、死なれぬ業を數きけるが、漸次に精盡き、根疲れて、氣の遠くなり行くにぞ、渠が最も忌嫌へる蛇の蜿蜒も知らざりしは、せめてもの僥倖なり、されば玉の緒の絶えしにあらねば、現に號泣する絲より細き婦人の聲は、終日休む間なかりしとぞ。

其日も暮れ、夜に入りて四邊の靜になるにつれ、お村が悲喚の聲湧えて眠り難きに、旗野の主人も堪兼ね、「あら煩惱し、いで息の根を止めむ」と藪の中に走入り、半死半生の婦人を引出だせば、總身赤く腫れたるに、紫斑々の痕を印し、眼も中てられぬ慘狀なり。

かくても未だ怒は解けず、お村の後手に縛りたる繩の端を承塵に潛らせ、天井より釣下げて、一太刀斬附くれば、お村ははつと我に返りて、「殿、覺えておはせ、御身が命を取らむまで、妾は